

アメリカ・ツアー本編になる。京急を使い、品川から羽田国際線ターミナルに向かう。当たり前だが国際線専用の駅だ。国内線は次の最終駅になる。これが面倒なのだ。

例えば北海道・千歳から羽田国内線に到着するが、国際線ターミナルには連絡バス、京急、モノレールで行くことになる。全く別な飛行場に行くようなものだ。シアトル、シカゴ、ミネアポリス、サンフランシスコなどは無人の車両で簡単にターミナル間を移動できるのに、先進国といわれる日本ではこのあり様だ。首都圏の方たちには関係のないことであつても、それ以上の数の地方飛行場経由の海外旅行者や、これからも増加するインバウンドの利便性を考えると、成田同様、国際飛行場の施設としての質はまだまだ途上国並みの現状だと認識すべきだ。

## アメリカの勝者の論理を まがいにする

利用した航空会社はデルタだ。マイルを貯めて利用したビジネスクラスに乗り込み、ロサンゼルスに向かった。今回は到着してすぐレンタカーで2時間ほど運転するので、機内では映画も見ないでただ快眠を目指すことに集中する。

シートに到着すると、そこには

ブランケットとアメニティがあり、そこからソックスを取り出し、朝から履いていた自分のソックスと交換する。ひと昔の日本人ビジネス客はアメニティのスリッパを使っていた人が多かった。しかし今では日本人客もソックスの選択率が多いと思う。スリッパを使うということは自分のソックスをそのまま使用するか、裸足になるかの選択になる。自分のソックスをナンドカンダで家を出てからアメリカ到着後のホテルまでの20時間はどうなんだ、もしくは機内で裸足になるのはどうなんだ、と考えるとアメニティのソックスの選択は正しいということになる。

このような考え方は国際線を運航する日本の航空会社は選択の一部として考えることができるだろうか。いろいろ選別というよりも現実の安全・安心・清潔を考えると、デルタに乗った時からアメリカの勝者の論理を学ぶことになる。

組み換え作物も同じで……、止めとおこう、分かっているのに理解し

## アメリカに 行って来た 4

Vol.124



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

ようとしない生産者に何を話しても時間の無駄だ。

CAはお客さまではなく「ミヤイさま」とウエルカム・シャンパンを持って来てくれるが、酒は飲めないのでもペリエかオレンジジュースになる。睡眠導入剤と一緒に、飲み物やピーナッツなどのスナックを食べるが、離陸してすぐに前菜から始まるデルタの素敵なお食事が登場する。周りを見ると

# オレにも 言わせる!

## 北海道長沼発 ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

不思議な光景が目に入る。日本語が少しでもできそうな白人は日本食の選択がほとんどの様だ。私は事前にデルタのウェブサイトでからビーフの選択をした。

## 6000円以上の価格ならステーキ? 日本食?

あるネットの書き込みにあったが、デルタのビジネスクラスの食事は原価で3000円以上だからレストラン価格で6000円以上になるのだろうか。6000円のステーキか日本食の選択だとおのずと答えは出る。デルタのテンドーロインは最高である。余分な脂肪はないが柔らかい、いきなりステーキとは一線を画す素材だ。食事の時に出来るロールパンがこれまた絶品だ。食後のデザートはチーズの盛り合わせ、果物の盛り合わせになり、昔は両方頼んだこともあったが最近では年なのかそれも無理。ハーゲンダッツ並みの仕上げのアイスクリームまで食指が動くことが無くなった。

あとは寝るだけ。やはりアメニティの中から耳栓を取り出してから寝る。国内にいる時も普段からこの耳栓を持ち歩いている。ただの耳栓ではない。人が話す周波数帯は聞こえて、それ以外はシャットアウトする。飛行機(小型機も含む)やトラ

クター、コンバイン、スプレーヤー作業の時も使っている。だからなのか毎年受ける航空身体検査でも耳の衰えはない。最近の小型機(セスナ、パイパー、ビーチなど)操縦の時はもっとハイテクになっていて、ノイズキャンセル機能のヘッドホンで管制や機内のインターホンとして使う。初めてこのヘッドホンを使ったときはあまりの無音状態に驚いたものだ。メーカーは国内のソニー、パイオニアなどもあるがアメリカのBOSEが人気がある。別に音の話をしたくない訳ではない。いろいろな雑音の排除もアメリカ製は群を抜いているということだ。

## 犯罪寸前の話

今はESTA(電子渡航承認システム)の導入で90日以内の滞在であれば、昔よりはアメリカ入国に関するストレスは少なくなった。アメリカがESTAの利用を認めているのはすべての国ではない。それだけ日本が豊かになった証拠だ。

ESTA以前はアメリカ入国に際し、機内で関係事項を記入した。質問には「共産主義者ですか」「ナチの協力者でしたか」「細菌兵器に関与しましたか」があったと記憶する。正直な日本人だったら自民党支持の共産主義者は入国できないこと

になる。ほとんど田舎の伝説の様に扱われていたので自民党支持の社会主義者には関係はないのかも。

21歳の時に6カ月のオーストラリア農業研修から帰ってきた。正直、物足りなかった。ではどうしたか。1978年6月3日に親にはあまり説明せず、同意もなしでアメリカに向かった。目指したのはビキニに金髪・ブルーアイが似合うハワイ。とりあえず1週間のんびりすることにした。

電話で今は無きパンナムの航空券を予約して、丸の内のカウンターで1年間オープンを確か17万円で購入した。当時はB2ビザと呼ばれ旅行会社を通じてアメリカの入国ビザを入手した。滞在可能期間は6カ月になるが現金も入国時に必要だ。21歳の若造に大金があるはずもない。さくどろするととなった。犯罪寸前の話があった。とりあえずあるのは日本円で30万円だ。そこである人からこんなことを聞いた。

トラベラーズ・チェックを作り、紛失したことにして再発行してもらう。入国後は紛失届を出したトラベラーズ・チェックは必ずトイレに流す。つまり入国係員がアメックスに電話をしない限り見かけ上、2倍のお金があることになる。

当時のドルのレートは225円で

22万5000円で1000ドルのトラベラーズ・チェックを作り……で、やりませんでした。

さすがにビビったのでしょね。当時のハワイは今と違い21歳の若造にアロハではなかった。入国係員は「何しに来た?」となることは想定していた。オーストラリア農業研修の時に同じくアメリカ・カナダ組の事前研修会でもらったメンバー表を持参していたので、係員に「彼らに会いに行きます」と伝えパスポートのスタンプを見せ「ほら自分もオーストラリアに行っているでしょ?」。係員は「お金は?」と聞いてきたので私は「1000ドルあります。帰りの航空券もあります」。怖い物知らずだったのですね。

ただ変な自信があった。オレ様を入国拒否するはずがない。清教徒の国にウソをつけて入国するわけにはいかない。でもあの時に偽装1000ドルを作りそれを見せて、係員がアメックスに電話していたら、間違いなくムシヨ行きだったでしょう。

その後の人生でもっとひどい金絡みで騙そうとする輩や組織に会うことになるとは、その時は知りませんでした。そんなことをアメリカに行く時はいつも機内で考えながら眠りにつきます。